

## ベア=レイ・ド・ミュラ：十八世紀スイス・ロマン ド文学者のいちプロトタイプ

著者	加太 宏邦
出版者	早稲田大学理工学部一般教育人文社会科学研究会
雑誌名	人文社会科学研究
ページ	13-34
発行年	1981-03-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/1682">http://hdl.handle.net/10114/1682</a>

# ベア＝ルイ・ド・ミュラ

——十八世紀スイス・ロマンド

文学者のいちプロトタイプ——

加 太 宏 邦

## 1

ミュラの『イギリス人についての書翰』は次のようなことばで結ばれている。

僕は収入のとぼしさこそ隠栖の必須条件だと信じている。隠栖こそ人生の幸福の必須条件であるのと同じように。それに、極度に豊かな人には成さねばならぬことが多すぎることもある。あの〔サマセット氏の〕豪華な館にいと、テンプル氏の隠宅と小さな庭が僕にはしきりに思い出され、僕も世を避け、ひそやかに暮すたのしみをもちたいと夢見るのだった。感じられることはこのことだけで、とるもとりあえずロンドンへ戻り、帰国の準備をしたのだ。

さようなら。僕のこの長旅は必ずしも無意味ではなかったと思いたい。今までの手紙が貴君の気晴らしとなり、又、そのためにいくら近くても、君がこの国へ来て、俗に言う<英国めぐり>などと称する凡々たる下らぬことをする気にならなかったらの話だが<sup>1)</sup>。

ミュラの最終便の後半は、イギリスの田舎についての報告だが、その中で、彼は田園を讃え、政治家でエッセイストであったテンプル卿の隠栖を訪れて、そのつましい生活に感動し、ついで同氏の紹介でペトワーチのサマセット公の別荘も訪問することが述べられている。この屋敷は、しかしながら百人からの召使のいる王宮のごとき隠居所で、ミュラを驚かすと同時に辟易させ、冒頭に引いたような手紙となるのである。そしてそれが結局この作品の結びともなる。

この『イギリス人についての書翰』をあらわしたベア=ルイ・ド・ミュラ  
 Béat-Louis de Muralt は、むしろベアート=ルートヴィヒ・フォン・ムラルト  
 Beat Ludwig von Muralt と呼んでもよいスイスの著述家である。

彼は1665年、ベルンのパトリツィアート Patriziat (patricien) 階級に属する家庭に生れた。パトリツィアートというのはベルンにおける四階級の内の最高位の階層名で、「都市貴族」と訳されるが、必ずしも貴族だけでなく、大富豪や外国（特にフランスや神聖ローマ帝国）で軍務につき爵位を得たような軍人もその構成員となっていた。しかし、決して流動的なものでなく、ほとんど十七世紀、十八世紀を通じて、その人数は68人と動かず、絶大な特権を享受した。ちなみに次位に来る階層はビュルガー Bürger (bourgeois) (公民) と呼ばれ、投票権や市議会への参政権を持っていたが、国政の中枢（政府、司法、軍事等）への門戸はひらかれていなかった。この階級に属するのはベルンに限って言えば、243家族と決っていた。ベルンは、この僅か3百家族くらいで支配<sup>2)</sup>されていた寡頭政治社会であった。

父のフランツ=ルートヴィヒは軍人であり、その一家は、南スイスのロカルノからベア=ルイの誕生を去ること約一世紀昔に新教徒として亡命して来た貴族の子孫であっ<sup>3)</sup>た。

当時のベルンでは、上流階級に属する人々は一般にドイツ語を喋ら<sup>4)</sup>なかった。フランス語が少なく共、外むきのことばであり、人々の教養はフランスからのみ吸収された。ミュラも16歳でジュネーヴへ遊学に出された。しかし、三年後の1684年、19歳の時、父を亡くした彼は、跡継という意味もあって、ヴェルサイユへ軍務の見習いをしに行くことになる。どの程度の期間、そこにいたかは不明であるが、この義務を非常に嫌っていたらしい。そして、おそらく、1694年頃、すなわち30歳になる少し前に、彼はイギリス旅行に出かけた。数箇月滞在し、その報告を、六通の手紙にしたためてベルンに住んでいる友人に送った。全く意図していなかったのだが、これが二十年後に、どういう経路をた

どってか、急に英国で、ボウブやデフォ、スウィフト等の手によって英訳され流布しはじめた。当然大陸にも逆輸入され、次に述べる『フランス人についての書翰』と共に彼の名は知られるようになった。ミュラはこれを好まなかったが、益々、写本の形で人々に知られるようになり、真意とはかけはなれたものも多く出回った。友人達の強いすすめで、やむなく匿名ということを経験にこれの出版に彼が同意したのは1725年、彼の英国旅行から実に三十年後のことであつた。その後、この著書は、十八世紀前半かなりの版を重ねた。<sup>5)</sup>その影響関係については後で少しふれる。

イギリス旅行をすませ、その足で、彼は、オランダ、ベルギー、フランスを訪れている。『フランス人についての書翰』六通が書かれたのは、この時である。旅を終え、1695年頃、ベルンへ帰着したが、はじめて実感を持って生活をしてみたパトリツィアートの世界の俗気になじめず、一切の公職にも就こうとしなかった。33歳で、マルガレーテ・フォン・ヴァテンヴィル Margarete von Wattenwyl と結婚し、翌年、娘マルガレータ Margaretha をもうける。ここからフランス文学史上少々特異な、そして、それゆえスイス・ロマン文学の精神の典型のひとつともなる世捨人、シャリエール夫人 Madame de Charrière とのつながりが生じる。すなわち、マルガレータ・ド・ミュラは、後、パンタの領主フランソワ＝マルク＝アンドレ・ド・シャリエール François-Marc-André de Charrière と結婚し、その間に出来た子供のシャルル＝エマニュエル・ド・シャリエール Charles-Emmanuel de Charrière が結婚する相手が、イザベラ＝アグネタ＝エリザベト・ファン・テュイル・ファン・セロスケルケン Isabella-Agneta-Elisabeth van Tuyll van Serooskerken、通称ベル・ド・ズイレン Belle de Zuylen すなわち後のマダム・ド・シャリエールとなる女性であつたからである。彼女は、実は夫とほとんど心通じ合うものを持ち合せていなかったと言われるが、実にその気質には夫の祖父と似たものを持っていた。そのことはあとでやはり少しふれる。

ミュラは子供を持った頃からベルンの宗教界とうまくいかなくなつて来た。<sup>6)</sup>パトリツィアートの狎臣に墮した権威的で形式一点ばりのプロテスタント教会

に批判的な態度をとったからである。彼の神秘思想めいた宗教観はドイツのシュペナー等の敬虔主義の南下（スイスでは、バーゼルがその入口となった）と相俟って、青年層にいくらか支持があったものの、ついに1701年ベルンを追放されることになった。<sup>8)</sup>若い日に学んだジュネーヴへ居を移してみたが、同じ問題が起こって、数箇月にしてここも追われ、ゾロトゥルンへ行く。再び追われ、しばらく放浪を続けた。この頃、長らく、オルレアン＝ロングヴィル家の領地だったヌシャテル地方がプロシア王の個人所有地にかわり、ここへ総督として派遣されて来た男とミュラが、友人達の仲立ちを得て、大層意気投合した。総督は、自分の妻のものになるはずだった一軒の農家風別荘を彼のために譲ってくれた。1707年のことである。現在のヌシャテルの町から湖にそって七軒ほど西南西にすすんだところにある僻村コロンビエの館である。この館がミュラの終の栖となり、それは又、この時からほぼ百年後に、シャリエール夫人が65歳で淋しく死んでいった栖となるところでもあった。そして彼女の死は三日後の1805年12月30日に、バンジャマン・コンスタン Benjamin Constant の日記<sup>9)</sup>にしっかりと記録され、その彼は一方で、スタール夫人 Madame de Staël につながり、このようにして、スイス・ロマンド文学の網は密にはりめぐらされていく。

ミュラは十三年前のイギリス、フランス旅行で種々のことを見たのだが、後に少し詳しく見るとおり、彼は自分の心情を告白し、それは隠栖への願望に収斂するものであった。彼はパトリツィアートの社会との間に齟齬があったから隠心をいだいたのではなく隠逸を願う心を持っていたから世の中との交渉忌避に傾いただけのことで、この後、実に四十二年間、1749年11月20日、84歳でこの世を去るまで、コロンビエの館で神秘道にのめり込んでひっそりとすごした。

### 3

『書翰』の概要を見よう。『イギリス人についての書翰』は六通からなり、それぞれが今日の手紙の常識から言えばかなり長文である。そのために一便に一事項というような簡単な話はない。第一の書翰では、イギリス人の一般生活、

議会、宗教、科学、商人、職人、農民、女性、再び一般論（このあたりから、英国人の良識 *bon sens* に着目した論が展開され、これを好ましいものとして評価する）、残酷さ（これには眉をひそめる）等についてかなり分類的に語られる。二便は演劇について。ベン・ジョンソン等、具体的な劇詩人に則して語られるが、野卑さが目につき「演劇はロンドンの墮落 *corruption* の原因であることは確信をもって申し上げる」<sup>10)</sup>とまで言う。又、モリエールの『守銭奴』の英語版との比較を行い、英版は筋が錯綜し、登場人物が多すぎることを批判する。「僕は主題の単純さ *simplicité* と統一は戯曲の欠点とは思わないし、登場人物の多さが美につながるとも思わない」<sup>11)</sup>と書く。モリエールに味方をしているのでもなければフランス最良をしているのでもなく、ミュラにはある内的基準があることを今は指摘するにとどめる。次にイギリス演劇に見られるユーモア *humour*（ちなみにこの語はフランス語初出のものとして今日、語源辞典に記されている）という特質を否定的に論じる。ここにも彼一流の動かしがたい一種の愚直さがあらわれている。第三信ではイギリス人の娯楽について語られる。オペラ、コンサート、貴人の寄り合い、一般の人々の飲酒、女遊び、賭博、散歩、遠足、恋愛、闘技、舞踊、食事、舟遊び、闘犬、闘鶏、刑場見物と続く。この最後の娯楽から、英国人の残酷さや冷酷さが語られる。その延長に、この国では自殺が安易に行なわれることが報告される。娯楽の主題がいつの間にか死の主題へ移ってしまったことを発見して自分で驚いているミュラがここにはいる。彼は、しかし、この残酷さをこう弁護する。「あえて言えば、隷属から身をまもるためには国民にとって、いくらかの残忍性が必要ということか。例えて言えば、君子たらんとするには、いささか厭世的であるのが必要なのと同じく」<sup>12)</sup>この手紙でも同じ色調が基層にある。第四書翰は主としてイギリス人の良識について語られる。その中でミュラの声が高くなっているところを引き出してみよう。

すでに君に述べたこともあろうが、イギリス人の中には仕事を逃げてむしろ休息と隠栖生活のたのしみを好む人々がいるのだ。この特異性は僕には重要なことと思える。又、我々が示している英国人の良識の数多くの証明の中で、このことに僕は一番す

んで着目したいと思う。それはこのことが大いに新味を持っているだけでなく我々にとって必要な教えを含んでいるからである。<sup>13)</sup>

イギリス人の良識はミュラによって単純に讀えられているのではない。その具体的な顕れ方が同感出来るかどうかと言われているのである。さらに同じコンテキストで、社会に出て仕事をし榮達を求める必要性こそ墮落と悲慘の根だと断言もしている。その他では、王権の前で志を曲げないベルモンド卿のエピソード、会話や文体における良識、交友等が総じて好意を持って報告される。第五番目の手紙では主として法制度について語られる。自由については、この存在に力点をおいて採り上げてはいる。しかし興味あるのは、その欠点にむしろ着目していることだ。ミュラはこれを「放縦にまで頽廢している」<sup>14)</sup>自由と呼ぶ。以下、ベニス商人の結末を思わすような詭弁的な法解釈のエピソード、娼婦や浮ついた女の存在、刑罰の軽さ、大まかな法律、陪審員制への批判等が述べられる。第六便はまずロンドンの町についての報告となる。道路、家屋、そして市内の主たる名所の案内となる。しかし彼は、例によって、自分の好み（ここでは町の泥や通行障害や喧噪を忘れることの出来るハイドパークとテムズ河）を前面におし出す。一方、当時建築中だったセント・ポール寺院について、これがあと数年で完成すれば「ロンドンの墮落の全部をおしとどめることが出来る」<sup>15)</sup>ことを期待する。次にロンドンの風物や気候にふれたのち田園を描く。その途端、讃歌がとび出し、最後に、例のテンプル卿の田舎家訪問のようこびとなり、手紙は結ばれる。

次にこの続篇にあたる『フランス人についての書翰』<sup>16)</sup>を眺めていこう。こちらにも六便あるが『イギリス人』よりさらに長文である。

第一信は、フランス人の特質として才知 *esprit* と機敏さと洗練さと礼儀があるとし、特に才知をイギリス人の良識に対するものとして指摘する。しかしこの才知は最大の欠点——一番目につく我慢のならない欠点——として糾弾されていることが徐々に明らかになってくる。例えばフランス人における社交性は才知の好例であって、ミュラが次のように言う時、それはほとんど彼らとの

断絶を自覚する慨歎でしかない。

フランス人は、洗練された丁寧極まることを言いあうような社交会話に喜びをおぼえないということが可能であるなどとは、理解も出来ず、孤独癖を持つすべての人に対して、<sup>17)</sup>みみずく野郎とか哲人だとか呼ぶ傾向がある。

宮廷生活なども同断である。かくて、フランス人の口から「才知は他国に比してこの国に多いのでなく、絶対的に存在していて、言いかえれば他国は才知の欠落した野蛮人の国だ」<sup>18)</sup>とまで言わせ、それを筆録することによって、観察者とフランス人との間の才知の取り扱いの根底的な差を明白にする。第二信。さらにフランス人の特質について語られる。社交、友愛がとりあげられるがここでも軸となるのは彼らの才知である。ミュラにとって「大いに奇怪なこと」<sup>19)</sup>として、彼らが人間性に善良さを求めず、これを大いに蔑視し、ひたすら才知を賞揚することがあげられる。才知が、彼の文面では単独に用いられず、善良さに対して使用されているので、当然のことながら、批判の意図はアプリオリに存在していると言わざるを得ない。ミュラは執拗に才知を論じて次のように言う。「才知ある人間で悪しき心を持つくらいなら馬鹿と呼ばれても良い心を持ちたい」<sup>20)</sup>。ミュラは、フランス人に必ずしも善良さが欠けている、と言うのではない。欠けているのは、この善良さを評価するための、すなわち嘲笑的風潮を否定するための良識なのである。なおその他に放縦な子供達、儀礼、装身、社交界等についても語られる。フランス文化の都会的な性格を、観察者の個性は、知らず知らずの内に浮出模様に織っているのに気づく。第三便ではフランス人の会話における自己顕示、儀礼の多さ、華美がのべられる。「最上の儀礼というのは、人にそれと気づかれぬことで、香りについて、最高なのは無臭だということと同様である」<sup>21)</sup>とミュラが語るのは、もはや我々の耳に極く当然のこととしてひびく。ミュラには外形を形式的に飾ることが気に入らないのではなく、飾ること自体がすでに問題になるのである。同じ線上でフランス人の礼儀や慇懃さ、おべっかの使い方に対して意見が述べられる。その他、食事、賭事、流行にも筆は及ぶ。特に流行については、フランス人の精神の軽さ、移り



気、変化好みにつないで、紙幅をいわず詳述される。ミュラの精神の鏡には最も同感したくない奇異なものとして、これは映ったことだろう。第四の書翰では、フランス人の性格が地方別、職業別（農民、労働者、商人等々）に述べられたのち、書物、歌劇、音楽等の観察がなされる。又、フランスに独特のabbé という名の世俗人や petit-maitre という伊達男、partisan という成金的な徴税人、カードのいかさま師等を描く。次に貴族、軍人、婦人、娘を評し、さらにフランス人の中華思想ぶりにも言及される。第五番目の手紙。才知の煌めきと善良さを再び比較し、後者こそ「魂の目」で、前者はこれを表わすための「言葉」だと言う。両者相俟ってはじめて完全なのだが、ミュラには才知というものが質朴純一さ simple を欠く傾きがあるのが気になる。このことから論議は倫理的色彩が強くなり、作家における善の問題に入る。善を第一義とするミュラの規範にはずれるヴォワチュールやサラザンは否定される。さらにスカロン、ラブレー、ボワロー、フォントネル、パール等が善の標式から判定されていく。例えば『批判辞典』の著者の精神の性格というのは、いかさま師のそれであって、しかもおそらく、地上にかつてあらわれた全いかさま師をあ<sup>22)</sup>わせたそれであって、最もひどい札つきのそれだ」というような、ミュラの今日までの語り口からは想像しがたい荒々しいことばすら聞かれる。ベルンの図書館にあるという肖像画から見るミュラは、ひとことで言えば剛毅な男という印象を与える。堅固な精神の持主で、ほとんどどんな外からの影響にもゆれ動かぬ顔つきをしている。この知性豊かなモラリスト的貴族には、そのためなおのこと心の中で、外からの不快を増幅させてしまう傾向があるのかも知れない。この第五信ではまだ才知の問題にからんで、様々なことが言われている。そして彼の好みのラ・ブリュイエールがあげられ又、フェヌロンやラ・フォンテーヌ、ラ・ロシュフーコーについても言及される。ミュラの本意は才知も良識も共に宗教に役立たねば意味がない、ということに落ち着いてくる。この論議は、結論が先にあって、そのあとに才知や良識の比較がおかれ（後者はその性格上、宗教に結びつきやすいので今までの論議でも肯定的に扱われていた）そのさらにうしろにイギリス人やフランス人の生活実態があって（イギリス人は

良識にすぐれているため比較的讃えられた)等々という具合に普通の意味でいう客観的とは全く逆の仕組になっていることを我々はここで再び確認することとなる。さて、この五信は一千行に及ぶ長大なもので、さらに女流作家等にもふれられて終る。第六便。リヨンまでの馬車旅行の途中、道づれになった一人の知識人とボワローの『諷刺詩』についての評釈をする。詩論が展開されるが「諷刺詩は人間をその墮落から正すべきものだ」<sup>23)</sup>等の意見が開陳されることや、しかじかの詩は「質朴純一であるからよろしい」とか「才知がなく質朴だから好ましい」というような口調を持った今まで通りのミュラが全面的に顔を出している。この書翰のみ付録的で独立をしても読めるが、とにかくここで書翰六通が終了する。

#### 4

以上、概観した通り、ミュラの『イギリス人とフランス人についての書翰』は畢竟、いわゆる旅行記などの役割は一向に果していない。いわんや旅行案内でもないことは、国より人を主題としていることでもわかる。又、確かに比較文化とでもいう性格がないわけではないが、要するに彼が対象を映して比べたのは己の心情の鏡の上においてであった。

ベルンに在る友人への第一信の書き出しにすでに客観性の問題にこだわる彼の意識と無意識の複雑なもつれが見られる。

僕は、これから見ることを君に知らせよう。但し、そんなに徹底して観察する訳ではない。正確には知らせるつもりだがそれは僕の心に映ったままのものでしかない。言いかえると僕がいくら正確を期しても、二人共が誤ることも度々あり得る。要するに、僕が君に書き送ることについては、真実を目ざしはするが、必ずしも真実を語ることはうけあえないし、思うに、そういうことをうけあうのは無茶というものだ。<sup>24)</sup>

ミュラを嚆矢とするなら、英国便りとでもいうジャンルを徹底させたのがヴォルテールであろう。彼の『イギリス書翰』はミュラの作品出版の、二、三年後には想が練られはじめ1733年から4年にかけて上梓された。ヴォルテールは<sup>25)</sup>もちろんミュラを読んでいたが彼は全く客観についてこだわらなかった。唐突<sup>26)</sup>

とも思える書き出しでクエーカー教徒について語りはじめる。ミュラには行きつもどりつの客観性についての陳述があり、しかも『書翰』のはじめから終りまでこの精神状態がゆれ動いている。記述は注意深く独断をさけ、客観をよそおった文体が使われている。「一般的に申せば」とか「ここだけという訳ではないが」とか「他の意見もあろうが」とかいう留保や頻出する比較表現に<sup>27)</sup>気づかぬ読者はあるまい。にもかかわらず、ミュラはその行間からまちがいに己れの顔をのぞかせている。ヴォルテールの場合は、自分の宗教・政治思想等を強く正面に出して堂々と語ってはいるが語るその口の裏にあるはずの彼の姿について浮び上がるのは、結局この作に限って言えば実に才能豊かで皮肉の巧みな二重の意味で古典となるべき諷刺作家ということになってしまう。<sup>28)</sup>

そうなるとモンテスキュのことも少しふれねばなるまい。彼は1729年イギリスに行き、九年前にすでに出版した『ペルシャ人の手紙』の中のウスベクに言<sup>29)</sup>わせた意見を追体験することになる。彼は「ノート」の形でしか、イギリス体験を残していないし、それはずっと後(1818年)になって発見され刊行されたものだから、同時代人には特に影響も与えなかった。政治法律体制(特に「自由」の問題)についての言及は、後の『法の問題』等とも重なり合う所が多く、それなりに興味あろう。しかし全体としては、彼は印象というより観察をしたことをメモした程度だから、我々がそこに探り出せるものは僅かである。例えば「ロンドンの人々は肉を大いに食う。従って彼らは頑強になる。しかし40歳か45歳になるとくたばってしまう」とか「ロンドンの道路ほど恐ろしいものはない。実に汚ない。舗装が整備されていないから大型馬車では通行はほとんど不可能だ。辻馬車なんぞで行く時は遺言状を書いておかねばならぬ」という類いである(同じ「ノート」でもボードレールの『哀れなベルギー』には呪詛の中に彼自身がなんとあふれているか)。<sup>30)</sup>

ミュラは見た物を語る時、比較という形式をとり、第三者をよそおう。しかしながら結局この相対主義を徹底してすすめようとする対象が持つ価値は無限に拡散し、ここに主観が顔を出すというパラドクスが必然的に生じる。ミュラにはその徹底があるとは思えないが、彼における対象は結局のところ己れの

観念に奉仕させるためにしかこれを使用していないのではないかと思わざるを得ない。しかも、その観念はさらに深く彼の内部に結びついてくるためここに彼自身が姿をあらわすことになる。

イギリスの女性について述べれば、

女性について僕が見出す大いなる魅力とは、僅かなことでも赤くなったり、ちょっとした瞬間に眼をふせる羞恥心<sup>31)</sup>というか、ひそやかなはにかみである。

となり、演劇について述べれば、

演劇の楽しみに最も必要なものは、僕の考えに誤りがなければ自然の巧みな模倣である。この結果として、技巧が表に出ないし、作家の存在を思わせないし、観客が、登場人物に心うばわれ、台詞や所作を自分に重ね合わせられるのである。<sup>32)</sup>

という風に、彼の中にはつまるところ、しかしかの国の女性とか演劇とか言う比較文化論とでもいうようなものを本質的には不毛にしてしまう強い主観が確立しているのである。例えばこの二つに、そしておそらく全体に流れているその主観は、質朴純一 simple ということばが含み持っている世界への確たる好みにささえられたものだろう。<sup>33)</sup>このことは次のような部分からも察せられる。

君はイギリス人が普通、質朴純一という語を誉めことばとして、小賢しいという語を貶しことばとして使っているのを納得をもって理解するだろう。良い人——お人よし bon homme——という称呼はどんな調子で発せられようとこの国では決して悪い意味でとられることがない。それどころか、彼らは自国民を讃えたい時には、good natured people すなわち peuple de bon naturel ということを引き合いに出すくらいだ。<sup>34)</sup>この表現もそのもの自体も他国にはないものだといギリス人は主張していた。

ここではさらに本然・自然 nature を基準とする判断が強くはたらいっている。この本然・自然は先の質朴純一に対してより底にある観念と言えよう。このクリテリオンをミュラの中に見出すと記述の具体的な内容はひとつひとつが彼の精神劇をより効果あらしめるための単なる小道具でしかないことになる。ロンドンの名所を描く時の彼は、まことに乗り気でなかった。「こういうことは手紙より絵の方がむいている」<sup>35)</sup>と言う。ただ報告の形式をまもるため案内ははじ

める。しかしこの案内で、彼の声がよく響いてくるのは、先に書いたとおり、都市・人為に対する自然・本然を選りわけた彼の内側の案内の声なのである。そして、ふれなかった名所の多さや本来なら見るべきものを数多くもらしていることに今さらのように気がついたごとく「そういうこと全部はほとんど出来<sup>36)</sup>ないという僕の控え目な、心からなる白状を聞いてくれたまえ」という告白をする。ここまでくると、この書翰につきまとっている独特な印象が、そのクリテリオンにもよるが、この一種の内面の告白にもよっていることに気づき、ヴォルテールやモンテスキュとの異質性も納得出来る。約7千行におよぶこの十二通の書状がのべているかに見える様々の事物観察は、小道具にしかすぎぬことを言った。どんな例でもよい。例えば、フランスにみられる書物、オペラ等を説明するののももどかしく、それらがいかにフランス人の墮落の原因になっているかを語りたがる顔付に、このことはすぐ見てとれる。彼のいう墮落は言うまでもなく都市文明の成熟、すなわち人為の徹底の別義である。質朴純一、すなわち本然・自然から遠ざかることで、人間の本来にむすびつく善良さがうすれ、人為のみにささえられる才知が横行することである。そのことに対する自分の好悪の感情を表白することに専念している彼がここにいるのである。

質朴純一と安寧を愛し、人生をすごすにあたっては、静かさを求め、喧噪をさけることをひたすら願う人々とか、人生の流れをかえることや自分の時間を訪問などに使いたくない人々とか、自分の家をいわゆる悪質で突飛な常軌を逸した今日の風紀から護りたいと願う<sup>37)</sup>人々とかその他、独特な考えを持つ人々は、フランス人に対して好意を抱かない。

そして、ミュラも又、好意を抱かないのは言うまでもない。

## 5

質朴純一や隠栖そしてそれらの基底となる自然・本然のことを語ったミュラの同郷人ジャン=ジャック・ルソー Jean-Jacques Rousseau は精神の故郷も先に似かよっている。ルソーについてはあまりにも多くが語られて来ている。ここではルソー論を展開するのでなく、ミュラの流れにどういう形でかわり

があるかを見るにとどめる。

ルソーがミュラを読んだのは、1756年末から57年にかけてで、この時に、彼はいくつかの抜き書きと感想を記した。これが最近（1952年）ヌシャテルの図書館で発見され刊行された。『ペア・ド・ミュラの＜イギリス人とフランス人についての書翰＞についての備考<sup>38)</sup>』である。プレイアード版に移された十五の『備考』の内、我々の考察に関係して関心のある部分は、一、三、五、六、七、十、十一、十三、十四、十五であろう。その内容を極く簡単に記してみよう。（〔 〕がミュラの記述。括弧なしがルソー。（ ）は、前後のコンテクストから反論なのか同意なのかを引用者が示す）

一、〔ロンドンの住人を述べることによってイギリス人を語りたい〕首都の人間を観察してもその国民を知ることになるとは思えない。（反論） 三、〔フランスには自由がないが、一方フランス風自由というものがある……〕フランス人の自由とは悪しき習俗への自由のことで、隷属の最大の具であればこそこれを享受している。（同意）

五、〔フランス人が友愛を尊ぶこと〕ミュラはその悪影響より効能を賞讃している。

（反論） 六、〔社交会話で大方が意図しているのは自分を立派に見せること〕自分の欠点や悪徳を格言めかし、才知を使って詭弁で裏うちする。（同意） 七、〔こんな安易な方法だから真の姿をあらわす人は無視される〕従って一般に紳士など紳士以上のもの

でない。（同意） 十、〔フランス人は才知を必須の本質としているが、皆が持てる訳ではない〕この国では二種類の人間しかなくて才知ある人間か馬鹿である。良識ある人間など虫ケラ同然で、才知なき場合は死人も同様で、従って、この両者しかなくてもおどろくにあたらず。（同意） 十一、〔才知はただおさえ目立たぬようにする

べし。真理が才知を凌駕すること。才知はあくまで真理のひきたて役であること〕とところが皆は勝手に才知を人形みたいにそれを飾りたてて喜こんでいる。（同意）

十三、〔『批判辞典』の著者の精神の性格というのは、いかさま師の…（前述、注22）〕

理屈というのはどうにでもつくということ、このいつわりの技の馬鹿馬鹿しさをミュラほど巧みに説いた人はない。（同意）<sup>40)</sup> 十四、〔都市生活はあまりにも狂躁状態にあり、田舎にだけ我々を本然状態にみちびくものがある〕都市には外見だけの、表面だけの秩序しかなく、皆の心の底には無秩序でろくでもない心の乱れが支配している。

孤独な平安の中でしか人は宇宙の調和の真の法則のままなる情と意を秩序あらしめることが出来ない。（同意）<sup>41)</sup> 十五、〔自宅で平穩にすごせるようになるためにこそ旅をすべし〕孤独を愛し休息をたのしみとすることを知らずには世間では生活をすべきでない。（同意）

ルソーがミュラの著書をいかに自分と同根のものとして読んだかは以上の抜萃のやり方やそのコメントのつけ方でよくわかる。ここで二人を強引に結びつける作業は無意味だが、「第一」と「第五」の引用は反論の表明にみえて、方法論のちがいでであると弁護しておくのも無駄ではあるまい。ミュラは、前者においては結局その観察した都会風生活を否定し去るし、後者では、友愛の内実については批判的なのである。二人のちがいは一般的に言って、おそらく、ルソーがミュラに比べて透徹した直観力を持っていること、さらに言えばラディカルであるという点にある。ミュラの逃避に対してルソーは文明と自然、独居と社会を統一しようと果しない闘争を行なっている。ただ、彼がミュラを読んだことはかなりすなおにそのまま『ヌヴェル・エロイズ』に結実していることも事実である。サン・プルーのパリ報告の書翰とミュラのそれとの重なりはもちろんのこと、<sup>42)</sup>ヴォルマル夫妻のクラランでの理想的生活——隠栖、自然、質朴等——はミュラのクリテリオンとそこから始まる四十二年間の実生活の復原と言えなくはない。しかし、ここでの問題は影響関係の考証の精密化ではなく、ルソーが持った心的傾きが、影響の有無にかかわらず、ミュラのそれと似かよっているという事実なのである。質朴純一、あるいは自然・本然というキーワードを与えてその心的傾向を解くことが可能な人間がここにいる、ということである。<sup>43)</sup>この特性は極く一般的に言って、パリの都会が生み出す文明に強く対峙するものであることは先にふれた。しかし、さりとて、イギリス的な無秩序な野蛮さ、残酷さ（ミュラのイギリス批判はルソーにもそのまま見られる）<sup>44)</sup>とも対立するものである。いわば、いずれの両極にも偏しない自然・本然に基盤をおくものである。そして実は最も本質的なことなのだがこれはこのような具体的な指標を越えてよりひろく視界をめぐらす時、さらに次のようなことが問題になってくるのである。すなわち、彼らが担う特性は、個人的な資質につよく起因するものではあるが、一方でそれはスイス・ロマンズの文学者達の精神的な背景とも別ちがたく、しかも複雑に結びついたものである、ということである。

二人を質朴純一という語でむすびつけて結論を得て安心するのは無意味であ

って、むしろ結論はここからはじまるのである。

ミュラをプロトタイプとしてルソーを重ねてみた時、両者が持つ特性はある種の異質性としてとらえなおすことが出来る。それはひとことで言えば十八世紀フランス精神のアンチテーゼとしての、すなわち反フランス文化としての異質性である。この異質性は、もちろん、強調しすぎると環境決定論に陥る危険があるが、しかし又、一般的背景を指摘しないでは、我々はスイス・ロマンド文学を説明も出来ない。では一体、その異質性はどこから生じているのか。それは、スイス・ロマンドがフランスと同じケルトの地でありながら、ゲルマンの霧の濃く漂う地域だということにひとつの原因があるのである。この大地に染み入るような霧は彼らの精神にも染み入り、ラテン文化の光に照らされたフランス人と本質的な差異を生じさせたのである。あの理性の火花がパチパチ弾けるような閃光を放つ十八世紀フランスにあって、どのような人間が特異な存在として浮き上がってしまうかは想像に難くない。

十八世紀のスイス・ロマンド文学を概観してみれば、このミュラ、ルソーに続いて、オランダ人のシャリエール夫人がヌシャテル湖畔に隠栖し、スタール夫人がスウェーデン人と結婚しドイツに顔を向け、コンスタンがこの二夫人と一風変わった親交を結び、『アドルフ』という自意識との戦い、分析の苦汁を生み出したことがまず目につく。<sup>45)</sup>

フリードリヒ二世に仕えたオランダの男爵の娘、ベル・ド・ズイレンはかなりきまぐれな青春時代を過したのち、30歳で、ミュラの孫の妻として落ち着いた。彼女は、バンジャマン・コンスタンによれば、自分と同様、かなり風変りな女性<sup>46)</sup>だったらしい。結婚直後までは都会生活者で、例えば、パリではモーリス・カンタン・ド・ラ・トゥールに弟子入りをして絵を習ったり、モデルになったりしている。もちろん、ロンドン、ユトレヒト、ハーグ、アムステルダム、ジュネーヴにも滞在した経験を持つ。しかし自らすすんで好んだふしも見られぬし、夫に束縛された様子もないのに、彼女は小さな村で、オランダ語も忘れて後半生を隠居した。彼女を有名にした『ヌシャテル書翰』がどんな孤独な人間嫌いのシニクなそして醒めた眼差しで書かれ、又それはいかほど衝撃的



な効果を持ったかは興味のあるところである。<sup>47)</sup>形式分類的に言えば、おそらく古典主義的作法にのっとった作品なのだが、女主人公マリアンヌ・ド・ラ・プリーズの言動はかなり破格で、ヌシャテルの社交会だけでなくフランスモラリスト的教養からも逸脱している。そして若い日のコンスタンが夢中になって彼女にのめり込んだのはその点だったはずなのだ。それは『アドルフ』、『セシル』、『私の生涯』（俗に言う「赤いノート」）、『日記』等で充分知ることが出来る。<sup>48)</sup>

ヴォー州ローザンヌ生れのコンスタンは、その活躍の舞台をほとんどフランスに持ったものの若い頃の教育はイギリスやドイツでうけていた。彼は人的関係においてだけでなく、宗教においても、政治生活においても極端に不安定で「うねる波のような変化」<sup>49)</sup>を持った。孤独癖と巧みな社交生活の両極をゆれ動いた。これらのことは、フランスに住みながらフランス人と明らかに異なり、祖国というものが無条件には己れの内にとり込めないスイス・ロマンド人の特質の一端をうかがわせるに充分な生涯と言えよう。

スタール夫人は、ナポレオンと徹底的に対立し、その『ドイツ論』はフランス的でないという、彼女の存在を正に象徴するような見事な理由で禁書となった。彼女はパリ生れであるが、父ネッケルはフランス人ユグノーを母とし、アイルランド人を祖先とするドイツ系プロテスタントを父として生れたスイス人であって、ここからも彼女の心的傾向のいちじるしい北方気質をすでに理解することが可能である。ナポレオンによってフランスを追われるまでもなく、彼女はゲルマンを確実に理解したであろう。自分の五人の子供の家庭教師はアウグスト＝ヴィルヘルム・シュレーゲルであり、教育方針は、ルソーとペスタロッチのそれであると知れば彼女がいかに異質な「フランス人」であるかがわかる。『ドイツ論』は単に彼女の知性がドイツから汲みとったというような軽いものでなく彼女の内なるものの表明がドイツと自然に合致したと考えても良いようなものであろう。ドイツ人の内なる熱情、精神の重厚さ、夢幻的な孤愁への好みは、明らかに当時のフランス的なものときわ立って対照的であるのは当然だが、問題はむしろ、ゲルマン的ということがスイス・ロマンドの精神と全

く同じでないにしても、類縁性が強く、それが彼女の内に自然にあったということであろう。フランス文学は、スタール夫人——それはコンスタンでもシャリエール夫人でもルソーでもそしてミュラでもよいのだが——を介して異質な北方精神（特にゲルマン精神）と結びついたと言えよう。この地理的な結びつきは時間的橋わたしと姿を変えて十八世紀を十九世紀へとつないだ。

このようにミュラをプロトタイプとして見る時、彼のあとに続く十八世紀のスイス・ロマンドの著述家が、ゲルマン的な色あいから生ずる様々な非フランス的性格——質朴であったり、自然であったり隠栖であったり、国際的であったり、形はアンチテーゼとしてであるから色々あり得よう——を持っていたことは明らかであろう。しかもパリ中心の自己完結的、規範的フランス文化の中にながら、結果として内から批判の矢を放つという特徴を持っていると言える。広い意味でのフランスの文化圏にありながら、スイス・ロマンド人は本質的、本来的にはフランス精神を持ち合せていない。その彼らの中で欠落しているフランス精神は当然のことながらゲルマン的な精神でもって充分にうめ合わされている。

ミュラが完全なフランス的教養を身につけ、フランス語で旅行の記録をつづりながら、結局、フランスをしりぞけた理由を説明する大きな文化の底流がたしかにここには存在する。そしてそのことはひとりミュラだけの問題ではなく、彼の上を通り去った流れ自身の問題となっている。もちろん、ここで個人の資質は何より問題にされなければならないのは言うまでもないことである。又、国や地域、そして時代に統一的な色調を求めることに一切の興味を持たないでおくことはひとつの見識ではある。しかし我々は、先ほども述べたように、全体としてとらえた十八世紀スイス・ロマンド文学をフランス文学の中に安易に組み込まないために、ミュラを手がかりにしていくつかの作業をして来て、今、この問題はおおよそ説明し得たと考えている。

## 6

ミュラの方法に特徴的だったのは、その自己観察と一方で外国を観察し比較

する、という一見矛盾する二つの行為を同時に存在させている点にある。それは自国スイスが観察に耐える国ではないこと、従って、そこに住む「他人」も観察への興味をそそらないことの丁度裏がえしだと解釈すれば納得出来るよう。しかしより本質的な理由は、奇妙に聞こえるかも知れないが、彼がフランス語を使用する文学圏にいた、ということなのである。フランスを他国とする人間がフランス語を母語として、フランスを語る時、そこに完全な他国人が抱く乖離とは別種の距離感が生じるのは必然のことである。この距離感は内的な観察眼をつくりあげ内なるフランス語文化をよそものとして眺め、相対主義は自己への規範を必要とし、ここからゲルマン精神風土と相俟って告白や敬虔主義や心理学やロマン主義が次々と生れてくる。そしてここからいくつかの帰結をひき出すことが出来る。例えば、フランスは正にこの意味でコインの逆の面にあたる国で、もともと興味ある人間の住む興味ある風土を長く培って来たためボードレールやバルザックの世界が可能となったので、スイス・ロマンの「意志的」文学とは本質的にちがうということ等である。アンリ・ド・ジエグレルは、スイス・ロマン文学は「<sup>エステティック</sup>審美的であるよりは<sup>エティック</sup>倫理的」<sup>50)</sup>だと言う。一般的に言えば、観念性、非社会性、論理性等が色濃い文学だろう。これらは、いずれも観察者の立場という特質とも結びつき、おそらくここからアミエルという自問自答人間とかソシュール、ピアジェというディオニソス的なものとアポロ的なものの葛藤を具現化したような類例のない学者が出たのだと思う。もちろん観察はただ内的だけではない。スイス・ロマン人の外国観察というのはフランス人のフランス文化の中だけで充足することを暗黙の前提とする伝統とやはり対照的である。ただこのことは一方でスイス人が自分の国を捨てる理由ともなる。離郷は彼らの宿命とさえ言える。それは今日にまで続き、サンドラールやパンジェ、ボルジョ、ジャコテと「スイス出身のフランスの作家」を輩出しているのでもわかる。しかし我々は彼らに今まで見たような特質を認めることが出来たら——そして、それはこういう特質を一切無視したシャルル＝フェデルィナン・ラミュのその無視のし方にこそ一番よく認めることが出来るのだが——その時、「スイス・ロマンの作家」と言いなおすことも出来ると考え

る。又、一方で彼らの郷土志向は自分と自分の国とのむすびつきの弱さによって、実に逆説的だが意思的に強烈にならざるを得なくなり、このこだわりはフランス人と別つ目印になっていることが多いことも事実である。

スタロビンスキー氏によれば、スイス・ロマンド文学の特質はひとこと言え<sup>51)</sup>ば、「実り多いずれ」である。先ほどから述べている 観察者としての文学こそ利点でもある、というのである。そしてこの故にフランス人の「<sup>モノグロット</sup>単音声的ナルシスム」を回避出来るが、ルソーの場合これが個人的気質と重なって極端にすすみ、一切の帰属する文化さえ見えなくなり、「真理」のためのみに生きるようになった、という。我々のミュラや、少し注でふれたマリ・ユベルこそ確実にむしろそのプロトタイプだと言えるだろう。そして、他者としての空疎な魂を内からうめ立ててくれるのが、スイス・ロマンドにただようゲルマン精神であらう。

ミュラにとっての「真理」は自然・本然との合一で、当時のフランス精神と対極をなし、きわ立つことでスイス・ロマンド文学者として意識するとせざるとにかかわらず内なる自分を充足させ、この自律の方法は彼の中を貫いてスイス・ロマンド文学の十八世紀を支配しただけでなく、今日にまで至っている。

## 注

- 1) BEAT-LOUIS DE MURALT: *Lettres sur les Anglais et les Français*, 1972 (Bibliothèque romande)
- 2) 市の人口は1万そこそこであったが、カントンは40万の人口（支配下にあったヴォー州を含む）を擁する、スイスではぬきん出た強大な地域であった。  
HENRI GRANDJEAN et HENRI JEANRENAUD: *Histoire de la Suisse*, 1955. T. II p. 118 sqq.  
CHARLES GILLIARD: *Histoire de la Suisse*. 邦訳「スイス史」（江口清訳）pp. 55-62。
- 3) おそらくロカルノの近くの Muralto という、今日人口3千人くらいの村がその出身地だろう。彼らは、はじめチューリヒへ移住したらしい。
- 4) HANS O. REICHARD: *Guide de la Suisse*, 1793. (Réimpr. 1971) chap. 6.
- 5) ジュネーヴの Fabbri et Barillot 書店より出版。12折版。再版は1726年、27年、28年、47年、53年、55年、1801年。後ベルリンでドイツ語による校訂版（1897年）。

イギリスで1933年に新版。又イタリアで1961年、部分紹介の版。我々がこの考察で使用するの、先の注であげたように1972年の最新版。スイスでは生前、彼の『書翰』は酷評された。「しかつめらしく不明瞭な文体で書かれた悪書で想像力に訴える為のいかなる生氣ある観念も与えず、批評の点ではまちがっているし、判断の点ではほとんど正確さに欠ける」(*Mercur suisse*, nov. 1736, cité par V. ROSSEL: *Histoire littéraire de la Suisse romande*, 1903, p. 283.) 又、フランスでも、デフォンテーヌが「このスイス人は…詭弁に満ちた『書翰』で自分の不気嫌をぶちまけている」という酷評や「黒胆汁質のスイス人」等とも言われた (cité par V. ROSSEL: *op. cit.*, p. 296.)。

- 6) 当時のベルンは政治制度が確立してゆるぎない階層社会が出来上っていたが一方で知的生活の貧困化もすすんでいた。この点でもミュラには住みにくい世界であった。  
LOUIS-E. ROULET: *Voltaire et les Bernois*, 1950. pp. 15-17.
- 7) スイスではマリ・ユベル Marie Huber がこの少しあと敬虔主義を熱烈に語った。「さかしらな世界より狂気の世界を選ぶ」(1731年)という彼女はヴァラン夫人を経てさらにルソーともつながり、ロマン主義へ流れ込む。又、ロセルのように啓明主義の先駆的なものとする考えもある。それを解くミュラの別の著書 *«L' Instinct divin»* を今回は吟味するゆとりはなかった。しかし、彼が益々特異な宗教観にのめり込んで猖狂になっていったことは確かである。
- 8) 1701年2月15日付の命により、彼は宗教にかかわる発言を一切封じられ、これが彼の離郷を決定づける。彼は「ギラついたメッキ塗りの坊主共」と悪口を言ったといわれる (ROSSEL: *op. cit.*, p. 301)。
- 9) 「シャリエール・ド・テュイル死、僕をやさしく愛してくれた一人の女友達…」  
BENJAMIN CONSTANT: *Œuvres* (Pléiade), 1957. p. 526.
- 10) MURALT: *op. cit.*, p. 26. (以下、頁数のみの注はすべて同書による)
- 11) p. 27.
- 12) p. 50.
- 13) p. 54.
- 14) p. 62.
- 15) p. 78.
- 16) 初版で、すでに『イギリス人…』と『フランス人…』は合冊されている。
- 17) p. 95.
- 18) p. 98.
- 19) p. 105.
- 20) p. 106.
- 21) p. 122.
- 22) p. 183.

- 23) p. 198.
- 24) p. 9.
- 25) GUSTAVE LANSON: *Origines et premières manifestations de l'esprit philosophique dans la littérature française de 1675 à 1748*. 1907-1910. p. 266 に「イギリス便り」の系譜がのべられている。
- 26) 「かの聡明にして才知あるド・ミュラ氏…」VOLTAIRE: *Lettres philosophiques ou anglaises*, (Pléiade) p. 85.
- 27) p. 16, p. 62 等, 枚挙にいとまがない。
- 28) ヴォルテールを必ずしもそう決めつけられないのは, 全作品を通した論では, 又, 別の姿が浮び上がるからであるが, ここではふれない。
- 29) 書翰 104 等。
- 30) *Notes sur l'Angleterre* in *Œuvres complètes*, (Éd. du Seuil) p. 331 sqq.
- 31) p. 17.
- 32) p. 27.
- 33) ミュラが英国にいた年(1694)に出版されたアカデミ・フランセーズの辞典で simple の筆頭の例文は, Dieu seul est un être parfaitement simple となっている。しかし一方で, niais の意も与えられている。
- 34) p. 58. 又, 注 44) も参照。
- 35) p. 75.
- 36) p. 80.
- 37) p. 155.
- 38) J.-J. ROUSSEAU: *Œuvres complètes* (Pléiade) 1961. T. II. p. 1315 sqq. による。尚, 「注」(p. 1954) も参考にした。
- 39) しばしば出て来たこの才知 (esprit) は, 先にひいたアカデミの辞書(1694)や, その少し前のフルティエールの辞書(1690)で, どんな意味でもネガティヴに取り扱われていない。反・才知—親・良識の対比は, ルソーにおける反・フィロゾフ—親・自然人とでもいう対比と重なるものだろう。
- 40) 十四と十五は, 我々がふれなかった *Lettres sur les voyages* からの引用である。
- 41) このような結論は言い古されたという意味では凡庸なものであろうが自分の行なった幾千行にも及ぶ英仏両国人についての報告を極めてモラリスト的結論にしてしまうミュラの内面性の強さは注目してよい。
- 42) 特に第二部後半にはその共通点をあげれば枚挙にいとまのないくらいミュラと同質の報告がある。例えば第14書翰における友愛, 交際, 社交会話等。
- 43) Léo et MICHEL LAUNAY: *Le Vocabulaire littéraire de J.-J. Rousseau*, 1979. から simple とその名詞形, simplicité を引いて, ルソーの世界を構成して見ることが出来て, これは, ミュラとおおよそ重なる。又, いたるところで見られる自然的生

活や隠栖への願望はわざわざ比較するまでもないだろう。

- 44) 「イギリス人の野蛮さは知られている」として、その注の中に、ミュラの使用した英語をそのまま借りて「good natured people というがあれはウソだ」と言っている。ミュラは野蛮さと good natured people を二元的に考えたがルソーは同根のものとしている。*Emile, Livre second* (Ed. M. Launay, p. 107)
- 45) その他にも、コスモポリタンでベスタロッチの協力者であったスタプフェル Philippe-A. Stapfer, 博物学者であると同時にライプニッツ主義者であったシャルル・ボネ Charles Bonnet, ゲルマン精神とラテン精神の完全な二重生活者であった, シャルル・ド・ボンステタン (ボンシュテテン) Charles-V. de Bonstetten, 通称くグラン・シャイエ>で知られるヌシャテルの代表的知識人アンリ・シャイエ Henri-D. Chaillet, 当時シノワズリやチュルクリを超えて近東風俗を題材とした画を描いたコスモポリタンの画家ジャン・リオタール Jean-E. Liotard, スカンジナビアの神話をテーマにすることにより一種のプレロマンティズムに先鞭をつけた歴史学者ポール・マレ Paul-H. Mallet, 軽やかでさわやかなリリズムに満ちた作品『アネ村情景』を残したベルン・アカデミの法学教授ジグムント・レルバー (レルベル) Sigmund L. Lerber 等の知性がスイス・ロマンドの十八世紀に存在したこと, そして彼らがフランス精神に対して, 何らかの特異性を発揮したことをここでは付言するにとどめる。
- 46) B. CONSTANT: *Œuvres*. (Pléiade), 1957. pp. 101-109. ミュラの『書翰』は先へのべたように匿名出版であったが, その人物紹介が (おそらく本人の手で) 載せられている。それには, 「一般の人々が普通に持っている原則とはちがった原則で身を処する男」となっている。一方, ルソーはディドロに「隠遁者とは大層奇妙な市民」だと皮肉られている (1757年3月10日付)。この特異性は, パンジャマン・コンスタンにおいてもしばしば指摘されている。(cf. GEORGES POULET: *Benjamin Constant*, 1968)
- 47) 「湖畔に, 又近隣の小さな池に起こった大雷雨」とサント=プーヴは言っている。(cité par E.-H. GAULLIEUR: *Études sur l'histoire littéraire de la Suisse française*, 1856. p. 128)
- 48) B. CONSTANT: *op. cit.*, p. 15, pp. 146-147, pp. 101-109, p. 318, p. 473, p. 526.
- 49) G. POULET: *op. cit.*, p. 175.
- 50) HENRI DE ZIÉGLER: *La littérature de Suisse romande* in *La Suisse*, 1954. p. 148.
- 51) JEAN STAROBINSKI: *L'écart romanesque* in J.-J. Rousseau, 1971. pp. 393-398.